

富士川游『醫術と宗教』とその周辺

土屋 久

順天堂大学医学部医史学研究室

本発表は、富士川游（1865–1940）の『醫術と宗教』（1937年出版）を同時代の思潮の中に位置付けようとする試みである。

前記著作は、富士川の晩年に書かれた著作の中でも特に主要な位置をしめている。

富士川が70歳（1935年）から74歳（1939年）の最晩年、1930年代の後半にものした主な著作をあげると以下となる。

1935 「醫箴」「宗教の心理」「藝備醫志」

1936 「訂正・内観の法」「宗教生活」「長壽法」「俳諧寺一茶」「松尾芭蕉」「明恵上人」

1937 「中江藤樹」「改修宗教生活」「大和清九郎」「業の問題」「蓮如上人」「醫術と宗教」「石田梅岩」「香樹院徳龍師」「阿仏尼」

1938 「江戸床之助」「家庭文化」「宗教の教養」「讃岐庄松」「童子教」

1939 「盤珪禪師」「三河七三郎」「日本鍼灸醫學史」

筆者は先に本学会において、富士川の晩年の思想に特に顕著に現れる人間形成論的な傾向を、同時代（1930年代後半）の思想、取り分け教養主義との関連で論じたことがある（2013年度の発表）。その傾向が最も明らかなのが、『醫術と宗教』（及び『宗教の教養』）であると考えられる。

本発表では、先の発表成果を踏まえつつも、先には言及し得なかった「社会と医療・医術」との関係のみをみていくことにより、冒頭に掲げた問題に答えていきたいと考える。

富士川は『醫術と宗教』の中で、次のように発言している。

「病めるものとは人間が何等かの故障によりてその生活調律に異変を致したるものである。（中略）それがために社会的に低格のものとなり、ただ生物学的の問題たるに止まらず、社会学的にも重要な関係をあらわすのである。（下略）」。

ここには、病者を生物学の問題のみならず、社会学的な問題として捉える視点が端的に示されており、富士川の世界という観点から医療・医術をみようとするとまなざしが窺える。

そもそも富士川の世界の中で、「社会」という概念は重要な位置を占めており、さまざまな著作の中でその概念の重要性の指摘が散見される。

富士川の世界の後輩で哲学者の三枝博人（1892–1963）は、「『社会』または『社会的』という概念は、私たちが上り下りして指摘してきた如く、先生（富士川のこと–土屋）の学問、先生（同）の宗教、一般に先生（同）の思想においてたえずあらわれてくる概念なのである」と述べている。であるが故に、富士川の世界全体の理解の上にも、本発表における作業は意味あるものになってくると考えられる。